

編集後記

『人間科学研究』第7巻第2号をお届けします。今号は、和久洋三先生による学術講演会の抄録を巻頭に掲載しました。和久先生は、「子どもの目が輝くとき—創造力は生きるカー」と題し、子どもの観察・発想・表現について、巨匠と児童の絵画、童具館の積み木や玩具など、具体的なモノを例示されながら、ユーモアやエピソードを交えて熱く語られました。

本学教員では、こども学科9件、スポーツ学科2件、経済学部1件の投稿がありました。

井上氏は、近代学歴社会の黎明期における学生像について、坪内逍遙『当世書生気質』を題材に考察。「極楽トンボ」が飛び交った喜怒哀楽の青春時代を想像するだけで愉快です。

川村氏は、英語と日本語の違いを解明する対照研究の方法として、〈する〉と〈なる〉の言語型を主語の有無、動詞の自他、名詞句と動詞句、物と事の関係性などの観点から考察。

北川氏は、社会的養護の動向と保育士養成の今日的課題について、児童福祉、統計資料、施設規模、職員配置などの観点から考察し、保育士養成課程新設のビジョンを示しました。

佐藤氏は、「教育の情報化ビジョン」を掲げて文科省が主導する教員のICT活用指導力の基準の具体化・明確化について、教員を志望する学生を対象に、現状と課題を探りました。

清水氏は、国際ボランティア演習について、フィリピンでのフィールドワークの体験を報告。日本と同じ海洋島嶼国家における学生と児童の交流が新たな友好の架橋となります。

高氏は、いじめや不登校を始め、学校教育相談の意義と限界を認識し、カウンセリング導入の在り方を模索。児童の発言を傾聴、受容、共感、自己一致する方途を提言しました。

寺井氏は、子育て支援の重点項目「待機児童の解消のための保育所の受け入れ体制」を支援する「こども相談室」での実践例を報告し、母親の子育て心理について分析しました。

村井氏は、タブレット端末を活用する授業について、設定された「授業のねらい」を核とする、「学習形態」「活用力」「学習事象」の関係性を前中後の段階別に表す見取図を提示。

馬場は、日本文学における授業改善の方法を模索。『おくのほそ道』の作品世界を学生と共に鑑賞し、自作俳句を毎回選定する作業を通じ、五七五定型詩の有効性を見出しました。

杉林氏は、1年間の海外研修の成果報告。スウェーデン陸上競技連盟のクラブチームとコーチングの実際を見聞し、トップアスリートを養成するトレーニングプログラムを探求。

山木氏らは、冬季オリンピックのソチ大会が開催された折柄、ウィンタースポーツ実施について考察。20歳未満のメダリスト誕生は、13歳以下の子の有無が影響する点を証明。

枝村氏は、ドイツの哲学者ライプニッツの観念論について考察。哲学とは存在の根拠を思索し続ける学問。精神・物質・実体の相関を解明する人は強靱な論理的思考力の持ち主。

どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2014年3月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学部に帰属します》